

## 第2回 泉佐野丘陵地緑地 運営審議会

日時：平成29年9月20日（水）14:00～17:00

場所：泉佐野丘陵緑地 パークセンター

### ◆出席委員（敬称略）

大阪府立大学 特認教授 増田昇（会長）

元大阪府立大学大学院 教授 前中久行

和歌山大学 システム工学部 教授 宮川智子

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授 加我宏之

和歌山大学 システム工学部 准教授 佐久間康富

うみべの森を育てる会 代表 西台幸子

大輪会事務局 大西弘薫

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 代表 那須利之

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 副代表 中川有司

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 事務局長 永井利治

泉佐野市都市整備部 部長 河井俊二

### ◆欠席委員 なし

### ◆傍聴者 3名

### ◆概要

1. 現地確認（東地区） 14:00～

2. 前回のふりかえり 15:00～

3. 協議案件 4件

- ①東地区の竹林対策について
- ②東地区のPRイベントについて
- ③中地区追加開設区域について
- ④ミドリシジミの保全について

4. 報告案件 5件

- ①プログラム報告（6～8月）、活動計画（9～11月）
- ②えんづくりプログラムの審査結果について
- ③パークレンジャー養成講座について
- ④企業の森活動体験会について
- ⑤その他

### ＜前回のふりかえり＞

前回のふりかえりについて、事務局より説明。

### ＜協議案件 1：東地区の竹林対策について＞

東地区の竹林対策について、事務局より説明。

- ・ 薬剤に関しては、順調に予想通りの効果が表れていることが確認できた。今後の方針を検討するために役に立つ情報を得ることができた。
- ・ 浸透移行性の薬剤なので、植物体のどこから注入しても浸透していく。今回の薬剤も部位に関係なく効果がある。
- ・ 枯れて硬い状態になってしまうと、後の処理が大変になってしまう。その前の段階で処理しておくといいたい。切り捨て間伐ではなく搬出するのであれば、竹を切り、その切り口に薬剤を塗っておき、来年の発芽を抑制するという方法がよい。
- ・ まだ薬剤が残っているのであれば、竹が密生している場所に打ち、周囲にどの程度の効果をもたらすのかも試験するとよい。
- ・ 薬剤が浸透移行する一定の範囲までしか効果が表れないはずである。範囲外に竹の竿とつながらない地下茎が残った場合は、笹のようなタケノコが大量に出てくるはずである。
- ・ 既存林の保全区域案について例えば、舗装道路と面しているなど放置しておいてもよい場所、何らかの対策が必要な場所など、戦略を書き込んでおいたほうがよいかもしれない。
- ・ 薄く既存林が残っているという A1 南側エリアは、戦略的に展開すると効果が高いかも知れないという話が現地であった。A3 エリアを拡大したような形で考えておくとよい。

### ＜協議案件 2：東地区の PR イベントについて＞

事務局より東地区の PR イベントについて説明。

- ・ 竹林の惨状を知ってもらうというよりは、巨樹や紅葉の魅力に絞り、ファンづくりといった方向性に絞った方がよい。ツアーの後にパークセンターで写真展を行うなど。
- ・ 中地区のように、まずは周遊園路を一本だけでも作ることができればよい。他は段階的な部分開放でも構わない。イベントとして年に何回か周遊できるという状態でもよい。
- ・ 公園は管理者がホームページにアップする写真よりも、愛好家などが個人的なホームページや SNS で発信する写真の方が魅力的なことが多い。
- ・ 全てを開設しなくとも、少しずつお客さんに入ってもらえるのであれば、仮設トイレは先行して設置する必要がある。
- ・ 未開設の部分を開設に繋げていくにあたり、税金を使うばかりではない、楽しい方法はないのか。東地区はそのような実験場と捉えるとよい。

### ＜協議案件 3：中地区追加開設区域について＞

中地区追加開設区域について事務局より報告。

- ・竹林の中の道が、誰が見ても園路とわかるかどうか。わからなければ、竹林の中に迷い込んでしまうお客さんもいる可能性がある。今のコラボレーション区域で開設された道は誰が見ても園路だとわかるが、今回のエリアもそのようにする必要がある。
- ・整備された竹林と放置竹林の写真を並べたようなパネルがあるとよいかも知れない。

### ＜協議案件 4：ミドリシジミの保全について＞

ミドリシジミの保全についてパーククラブより説明。

- ・ミドリシジミのための公園ではない。ミドリシジミの生息環境は元々、畦畔木として稲架掛けのために使われたハンノキという、農耕文化の中で成立してきた。人間がどのようにして里山と関わりながら生きてきたかを見せる場、という認識を持っておいてほしい。

### ＜報告案件 1：プログラム報告（6～8月）、活動計画（9～11月）＞

実施済みのプログラムと今後の活動計画について永井委員と事務局より報告。

- ・スキルアップ講座についてアドバイスが必要であれば、どんな内容を考えているのかも教えてほしい。視察先や講師についても、運営審議会で議論したほうがよいだろう。
- ・公園の理念については、数年に1度かは皆で共有する機会を持つべきである。100人規模の団体なので、数年に1度は理念を確認すべきである。

### ＜報告案件 2：えんづくりプログラムの実施結果について＞

えんづくりプログラムについて事務局より報告。

- ・定員の上限値と同時に下限値も設定しておいてもよい。旅行ツアーでも、ツアーが実施される最低人数が設定されていることがある。そうしておけば、仮に参加者が少なくて中止となった場合も、プログラムに申し込んだ人に対しては親切である。

### ＜報告案件 3：パークレンジャー養成講座について＞

パークレンジャー養成講座について事務局より報告。

- ・団塊の世代が一定数リタイアして、今は70代になってボランティア活動などに取り組んでいる。今は定年が65歳になったことから、リタイア後に何らかの活動をしたいという年代自体が少なくなっている。

- ・女性の社会進出が進んだことと同時に、定年が 5 歳延びたことで働く時間が増えている。これによりボランティア活動などへの参加はますます減ってしまう。パークレンジャー養成講座も長期的に見るとジリ貧である。今後の方向性は運営審議会でも議論すべきかも知れない。
- ・2000 年台と 2010 年台では社会情勢も変わっている。2010 年台は参画型社会がもっと進むかと思っていたが、むしろ競争原則の中でボランティアや CSR 活動といったことが弱っているように見える。
- ・緑関係の市民団体が解散していくことが増えていると聞いている。軽く参加する層については裾野が広がりつつあると思うが、責任をもってホスト役を担う人は少ない状況である。
- ・ボランティアで参加するにも、メリットが必要である。イギリスの事例では、例えば印のついている木は自由に切って、薪にするなど自由に使っていという例がある。自治体が依頼しているレンジャーが、切る必要がある木に印をつけておき、ボランティア参加する人はその木は切って持って帰ってもいいという仕組みである。対象となる木は、密集しすぎて間引くべき木などである。そうして会員は 250 人くらいいるらしい。
- ・第一世代のメンバーは常に、変わっていくことや獲得していく喜びを味わうことができるが、その次の人たちは同じことをやらされているという意識を持ってしまう。そこで新しい人たちがどのような刺激を獲得できるのかが、重要になる。
- ・イギリスの事例のように林産物をお土産にするのもよい。竹を 30cm 程度に切っておいて、20 本でも 30 本でも自由に持って帰っていいというお祭りでもよい。
- ・大輪会としては、パーククラブの方の興味のあることや、やりたいことを実現していただき、スキルアップした方が、新しい人たちに活動の醍醐味や魅力を伝えるといった、自律的な運営組織になってほしいという想いがある。
- ・例えば実生苗を呼び水として参加を促進するような仕組みを検討するとよい。既に実施されているドングリプロジェクトでも、子どもが実生を持ち帰って家で育てて、また公園に持ってくるという点が大切である。

#### <報告案件 4 : 企業の森活動体験会について>

企業の森活動体験会について事務局より報告。

- ・ある公園の事例では、森を再生していくために、森の実生苗を計画的に移動させてカスミザクラを繁殖させようという取り組みがある。そのように、なるべく購入は避けて実生苗をうまく移植するような方法を考えるとよい。

#### <報告案件 5 : その他>

土砂災害防止法に基づいた土砂災害警戒区域を明示した看板設置について事務局より報告。

以上